

# 記憶を、拾い上げる

## Artist

山越 梓 YAMAKOSHI Azusa

筑波大学芸術専門学群  
構成専攻 2年

## Writer

大政 愛 OOMASA Ai

筑波大学芸術専門学群  
美術専攻洋画コース 3年

### 構成された空間

「これは、記憶の展示です」。記憶とは、誰の記憶であろうか。現在、構成専攻 2年生で総合造形を学ぶ山越梓さんが1年生のときに行った個展「すりぬけるもの」にて、キャプションに書かれていた言葉だ。

展示空間の中心には、黒いつるつるした長方形の板、その中央に丸く敷かれた砂利のような白い砂、さらに砂利に刺さった上で光る白熱電球が見える。砂利でできた円の周りには光る白熱電球やアクリル板を支えるレンガなど、無機物で空間が構成されている。レンガには(N40463667, W3.74922)と、座標のようなものも記されている。他にも太い金属の管が3つ並んで立ってアクリル板を支えおり、さらに壁面に視線を移すとアクリル板が柵のように取り付けられている。その上には白い砂利盛られ、白熱電球が埋もれている。具体的な情報は、レンガに書かれた座標のみであるが、これは日本の座標だけ示しているのではないようだ。これらの物の、いったいどこが記憶だというのだろうか。私は、作品を見ただけではそれぞれのものが何を意味しているか全くわからなかった。ただ、無機的なもので構成されたギャラリーの中には神聖さも感じる空間ができあがっており、また作者が「アート」にしっかりと立ち向かっている姿勢を感じた。展示期間中、作者が積極的に構成専攻の先生方を中心に講評を乞う姿も印象的であった。

### 「記憶」と「関係性」

山越さんは群馬県高崎市出身であり、美術科のある高校から筑波大学に進学した。大学1年生の冬頃から「すりぬけるもの」「こぼれおちるもの」「home town」という名前で次々に大学内のギャラリーにて個展を行った。それらの展示は「物を選ぶ」「構成する・設置する」ということで成立し、それぞれの展示は「記憶」と「関係」というテーマで一貫していた。

彼女は言う。「『記憶』や『関係性』は今の自分の制作の中で重要なテーマです。また『記憶』とは個人的な記憶のことであって、自分の過去の記憶を反芻して制作を行っています。高校3年生のときの授業のレポート課題で、自分が影響を受けたものについて考える機会がありました。それまで、自分の考えは読んできた本に影響されていると考えていましたが、それ以上に宗教的な考え方や道徳、倫理観に自分は影響を受けていると気づきました」

中でも、彼女の原風景とも言える記憶は教会の景色だという。「4、5歳の頃、母親に連れられて週に1回、車で20分ほどのところにある教会に通っていました。信仰心などは特になのですが、そのときに読んでいた旧約聖書のイメージが根幹にあり、原風景的な役割を果たしています。例えば『すりぬけるもの』の原画は高校生のときに描いたもので、砂や電気を使ったことは教会に影響されているのだと思います。また、レンガなどに書いていた座標もエルサレムやスペインの

ある教会、そして自分が通っていた教会と当時住んでいた宿舎を示しています。そういった自分の『記憶の場所』と作品を結び付けるために書きました」

### 焼き付ける

連続した展示から半年以上経ち、山越さんの作風や考え方も変わってきた。最近作っているという、『焦点—痕跡』という作品がある。「高校時代、細密描写の授業が終わったときに先生から『これで君たちはもう紙とペンさえあれば、どこでもなんでも絵が描けるよ』と言われたんです。言いたいことはわかるけれど、その先生の言葉が自分には納得できなくて。『〇〇があれば〇〇できる』という関係は、もっと他にあるのではないかと考えました」。彼女が目をつけたのは、太陽光と紙の関係だった。スケッチブックの何も書かれていない白いページに向けて、虫眼鏡を手で43分固定すれば紙が燃える。無関係だった二つの物も人の行為が加わることで関連付けられて関係の質が変化する、というのだ。またここで燃やすものが本や辞書ではないのも、「行為や自然淘汰されたものの象徴をよりシンプルに可視化するため」という。

これは、以前の「記憶」をテーマにした作品とはかなり違う印象を受ける。これまでは「記憶」からのイメージの抽出や「今より少し前」を記録するような傾向を感じたが、今回はもっと「今」起こっている現象に焦点を当てたように感じる。しかし、「焼き付ける」という意味では変わっていないという。彼女は記憶を作品として焼き付けているのだ。「『すりぬけるもの』をはじめ、1年生の頃の作品はあまりいいと思ってやっていたのですが、今は自分がいいと思えるものが作れているように感じます。自分は、別にみんなに自分の制作意図をわかってほしくて制作しているわけではないし、今は自分が楽にできることをして、制作をしています」

彼女は記憶や関係を作品として焼き付けることによって可視化して「今」と繋ぎとめ、さらに鑑賞者を迎え入れること

で記憶を個人の記憶にとどめない方法を取っている。「新しいものを作りたいとは思いません。それは、網の目をくぐるようなことですから。ただ、新しい視点を与えるものは作りたいと思います」

### 拾い上げる

山越さんは、先日ワタリウム美術館で行われた「歴史の天使」という写真の展示会のパネルで目にした、多木浩二さんの「歴史の中で拾い上げられない一人を拾い上げる」という言葉にとっても共感したという。物を選んで置くという今までの彼女の展示の方法も、ある意味で、歴史と自分の記憶がつながるものを日常の中から選んで拾い上げているといえる。「感情や想いなど、失われるものやなくなってしまふものは『美術作品』へと形を変えて記録されます。だけど私は、なんでもない日常を、人々の見方を変えさせる美術の力を借りて保存したいと考えています。記憶は、個人だけの記憶で成り立つものではありません。作品として成り立ったとき、いろんな人にあるような見方をしてもらって、その記憶がその人の記憶になる。万人にわかってもらえるものじゃなくていい。2週間とか経ったあとに、ふとした瞬間思い出してもらえような、そんな作品をこれからも作りたいです」

彼女がもっとも影響を受けた作品のひとつが内藤礼の《精霊》という作品だ。神奈川県近代美術館の鎌倉館でその作品を見たそうだ。吹き抜けのような四角い空間に、一本の白いリボンが垂らされていた。建物の造りから、下から吹き上がる風によってドローイングのように軽やかに曲線を描くリボンを見て、はじめは「きれいだな」や「女性的過ぎるな」という感想をもったそうだ。ところがその作品を見てから2週間ほどたったふとしたときに、彼女は気づいた。「あの作品はその場所のために作られた作品で、1本のリボンでそこにある“風”をシンプルに可視化していたのだ」と。「美術作品は美術館を出たら忘れてしまいがちだけれど、実はアートはどこにでもある。そのとき初めて日常と美術館が地続きなのだ

と感じました」

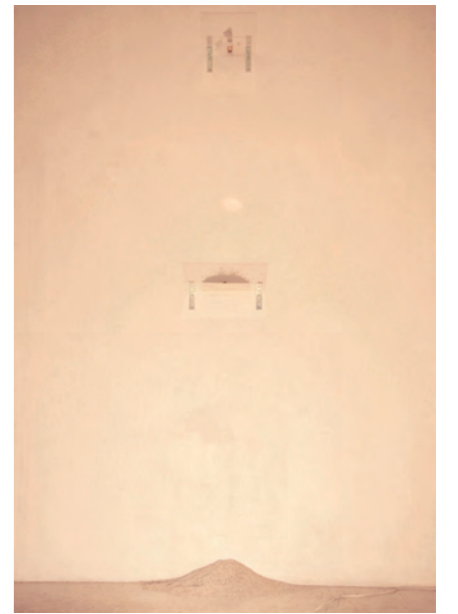
今度、山越さんは「記憶」を回収する旅に出るといふ。筑波大学から高崎市の実家まで歩いて帰るといふ。見慣れた道から初めて通る道、そしてまた見慣れた道へ。音声と写真で記録をしながら、それはインスタレーションの作品へと姿を変えてまた鑑賞者の目に触れることになる。彼女の作品は、しっかりと私たちの足元とつながっている。



山越梓《無題》2011年  
「すりぬけるもの」展  
2011年12月12日～2011年12月16日、作品部分写真



山越梓《無題》2011年  
「すりぬけるもの」展  
2011年12月12日～2011年12月16日、作品部分写真



山越梓《無題》2011年  
「すりぬけるもの」展  
2011年12月12日  
～2011年12月16日、作品部分写真



山越梓《焦点—痕跡》2012年